

Title	友人関係が中学生の精神的健康に及ぼす影響に関する研究/中学校生活に不適應を示す生徒の発言内容から作成した友人関係質問紙の検討/中学生の精神的健康度に影響を及ぼす仲間友人関係の特徴
Author(s)	熊谷, 有紀子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56162
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名（熊谷有紀子）	
論文題名	友人関係が中学生の精神的健康に及ぼす影響に関する研究 （ <ul style="list-style-type: none"> ・中学校生活に不適応を示す生徒の発言内容から作成した友人関係質問紙の検討 ・中学生の精神的健康度に影響を及ぼす仲間友人関係の特徴 ）
論文内容の要旨	
〔 目 的 〕	
<p>筆者は教育委員会のもつ相談施設に心理職として勤務し、学校生活にうまく適応できず、不登校、情緒不安定などの状態に陥っている中学生から、学校生活で起こる戸惑いや悩み、思うようにいかないエピソードを聴き、共に考えてきた。彼らの中には医療機関から診断を受けている者もいれば、医療機関を受診していない者もいる。しかし、診断はなされていなくとも、精神的な不適応をきたしている状態にあると言える。そのような彼らの発する、学習や学校生活における悩みや困り感は友人関係に関するものが多く、またよく似た特徴を有しているように感じていた。日本の中学生の友人関係を主題とした研究はいくつかある。しかし、そこで使用されている友人関係に関する質問紙を見ると、通常の生徒を念頭に置いて作成されており、友人関係についてうまく適応できていない生徒の視点から作成されたものはなかった。そこで、本研究では、まず中学校生活へ不適応を示す生徒の発言内容から新たな質問紙を作成することを第一の目的とした。次に、通常学級に在籍する中学生の精神的健康度に、友人関係がどのような影響を及ぼしているかを検討することを第二の目的とした。</p>	
〔 方法ならびに成績 〕	
<p>石川県金沢市内の、任意に選んだ中学1～3年生778名（男子402名）を対象に、友人関係を評価する既存の質問紙（榎本質問紙；12因子から構成。出典：青年期の友人関係の発達的变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応。風間書房、2003年）と筆者らが中学校生活に不適応を示す生徒の発言内容から新たに作成した友人関係に関する質問紙（新規質問紙）および精神的健康度を測定するStrengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)を施行した。新規質問紙に含まれる設問は、相談施設を訪れる中学生生徒の対人関係についての発話から作成された。筆頭筆者と最終筆者がその内容を検討し、追加と削除を繰り返しながら最終的に33の設問とした。回収された質問紙のうち、1つでも欠損値がある場合は除き、640名（男子330名）を解析の対象とした。1)新規質問紙において因子分析を繰り返し、19設問からなる4因子を得た。2)各因子のα係数を求め、第1因子「独立独歩」では0.752、第2因子「社交上手」では0.774、第3因子「評価重視」では0.669、第4因子「愛他性」では0.773であり、第3因子の信頼性にやや疑問が残るが内的一貫性は概ね保たれていると考えた。3)この4因子と榎本質問紙の12因子との間の相関を検討し、基準関連妥当性は満足できる結果であった。4)榎本質問紙（12因子）と新規質問紙（さらに因子分析を行い得られた2因子「対話重視」、「戸惑い」を追加し計6因子）の18因子のそれぞれを独立変数、SDQの困難性総合得点を従属変数とした単回帰分析を行い、有意であった6因子を得た。これを独立変数とした重回帰分析を行い、「評価重視」と「戸惑い」の2因子が有意であった。この2因子は新規質問紙に属していた。</p>	
〔 総 括 〕	
<p>因子「評価重視」の設問文の内容は、友人との会話の難しさ、友人から受けた不快な体験の記憶の想起、仲間友人を含めた周囲の他者が自分について抱く可能性のある評価の重視であり、因子「戸惑い」の設問文の内容は、周囲の仲間と異なる自分を見いだしていることを意味している。中学生の精神的健康の一部は、仲間友人関係において彼らが実際に示す行動や希望、他者関係における外に向かった気構えではなく、自分に対する気づきや内省的な姿勢に基づく可能性が示唆された。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (熊 谷 有 紀 子)	
論文審査担当者	(職) 氏 名 主 査 教 授 中 川 彰 子
	副 査 教 授 小 島 治 幸
	副 査 講 師 奥 野 裕 子

論文審査の結果の要旨

友人関係が中学生の精神的健康に及ぼす影響に関する研究を行った。筆者は相談施設に心理職として勤務し、学校生活にうまく適応できず、不登校、情緒不安定などの状態に陥っている中学生から、学校生活で起こる戸惑いや悩みなどを聴き、共に考えてきた。彼らの中には医療機関から診断を受けている者もいれば、医療機関を受診していない者もいる。しかし、診断はなされていなくとも、精神的な不適応をきたしている状態にある。そのような彼らの発する、学習や学校生活における悩みや困り感は友人関係に関するものが多く、またよく似た特徴を有しているように感じていた。

日本において中学生の友人関係を主題とした研究はいくつかある。しかし、そこで使用されている友人関係に関する質問紙は通常の生徒を念頭に置いて作成されており、友人関係についてうまく適応できていない生徒の視点から作成されたものはなかった。そこで、本研究は、中学校生活へ不適応を示す生徒の発言内容から新たな質問紙を作成することを第一の目的とし、次に、その質問紙と既存の質問紙を使用して通常学級に在籍する中学生の精神的健康度に、友人関係がどのような影響を及ぼしているかを検討することを第二の目的とし行われた。

新たな質問紙は、相談施設を訪れる中学生の対人関係についての発話を想起し、質問文の形に整え、筆頭筆者と最終筆者がその内容を検討し、追加と削除を繰り返し、最終的に33の設問からなるものとして作成された。次に、石川県金沢市内の、任意に選んだ中学1～3年生778名(男子402名)を対象に、友人関係を評価する既存の質問紙(榎本質問紙;12因子から構成。出典:青年期の友人関係の発達の变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応. 風間書房, 2003年)、新たに作成された質問紙(新規質問紙)および精神的健康度を測定するStrengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)を施行した。

結果、1) 新規質問紙において因子分析を繰り返し、19設問からなる4因子を得ることができた。各因子の α 係数は、第1因子「独立独歩」0.752、第2因子「社交上手」0.774、第3因子「評価重視」0.669、第4因子「愛他性」0.773であり、内的一貫性は概ね保たれていた。また、この4因子と榎本質問紙の12因子との相関を検討し、基準関連妥当性も満足できた。2) 榎本質問紙(12因子)と新規質問紙(さらに因子分析を行い得られた2因子「対話重視」、「戸惑い」を追加し計6因子)の18因子のそれぞれを独立変数、SDQの困難性総合得点を従属変数とした単回帰分析を行い、有意な6因子を得た。これを独立変数とした重回帰分析を行い、「評価重視」と「戸惑い」の有意な2因子を得ることができた。この2つの因子について、「評価重視」の設問文の内容は、友人との会話の難しさ、友人から受けた不快な体験の記憶の想起、仲間友人を含めた周囲の他者が自分について抱く可能性のある評価の重視であり、「戸惑い」の設問文の内容は、周囲の仲間と異なる自分を見いだしていることを意味していた。本研究において、中学生の精神的健康の一部は、仲間友人関係において、彼らが実際に示す行動や希望、他者関係における外に向かった気構えではなく、自分に対する気づきや内省的な姿勢に基づく可能性が示唆された。

本研究は、不適応を示す生徒の発言から、従来の質問紙とは異なる友人関係に関する質問紙を初めて作成できたと言える。また、通常学級に在籍する中学生の精神的健康に影響を及ぼす要因として「評価重視」と「戸惑い」の2因子を得ることができ、この因子は既存の榎本質問紙ではなく、新たに作成した質問紙に属していたことに価値があると思われる。今後、臨床的妥当性などの検討の必要性はあるが、学位の授与に値すると考えられる。